

文部科学大臣奨励賞

「一服のお茶から」

ジョアン オブライアン

Ms. Joanne O' BRIEN

(アイルランド・英語教師(ALT)・
加古川市教育委員会)

アイルランドの大学を卒業後、JET プログラムの英語指導助手として来日した。現在も引き続き兵庫県加古川市で英語教師をしている。来日してから日本語の学習を始めた。



「おいしくなるように、おいしくなるように」しんとした茶室の中で、茶釜の湯が沸く音と、私がお茶をたてる茶せんの音だけが聞こえる。どちらも私の心の中には「おいしくなるように、おいしくなるように」というおまじないのように響きました。

先日、お茶会で、私自身がお茶を点てる機会に恵まれました。完全ではない手つきで、しかし真剣に、心をこめて、私がお茶をたてているのを、お客様方がじっとまっけてくれている。短い時間ながらも、私にこの上ない平和な時間をもたらしてくれました。自分の居場所をやっと見つけたような気分でした。心をこめたひとつの行為が、他の人に理解、感謝されて受け入れられる。それはほんとうに簡単に見えることですが、日々の生活の中では、そんな単純なことがなかなかできないのです。

あるとき受けたアンケートの中に、こんな質問がありました。「外国人として、日本にあなたの居場所があるように思いますか？」日本に滞在して二年目のことでした。「私の居場所…」突然の質問に日本での自分の存在を問い直しました。友達もいる。仕事もある。日本語もわかってきた。でも「あなたの居場所は？」と聞かれて、私はそれに答えることは出来ませんでした。

日本語を覚え、周りが見えるようになると、あらためて感じるようになりました。私の日本滞在は一時的で、仕事とビザにより存在が認められているにすぎない。そしてどこへ行っても自分が異質であると感じさせられるのです。

今まで「外国人」として日本に住んできましたが、私は何度も自分が「お客さん」であることを感じてきました。いつも好意を受け取る側で、お返しする機会をなかなか与えてもらえません。日本でたくさんの経験をし、いろんなものを受け取った私は、今や日本の生活を抜きにしては自分を語れません。それでも私が所属しているこの社会で、「お客さん」にしかたれないことは、私にとっては寂しいことでした。

多くの人は私を見るとき単に「青い目の白人」として見ています。私の心を見てくれるのではなく顔から「英語」を感じ、髪の色を見て「国際的」という言葉を感じています。そんな彼らにとってわたしは「外人」というだけで、「人間」ではないのです。

「お箸使えますか？」「お刺身は食べられますか？」「何年日本にいますか？」くり返される質問に、私は「もういいよ！」と叫びたい気持ちでいっぱいでした。いくら日本語を勉強しても、またいくら日本の習慣に従ったとしても、そんなことは問題ではなかったのです。いろんな経験により、自分を変えること

ができて、そのお返しに何かをしたくても、なかなか受け入れてもらえない。自分の居場所も見つけれない。それは日本で私の存在は「お客さん」でしかなかったからです。

「お客さん」。その考え方が少し変わったのは二年間習ってきたお茶のお稽古を通してでした。茶室の中ではすべての人は平等です。お茶をたてる亭主が一番重要に見えますが、お茶を飲む客がいなければそのお茶をたてる意味がなくなります。亭主と客人はそれぞれの役割があって、お互いに相手を尊重しあう平等な関係にあります。

人間はいつも好意を受け取るだけではなく、好意を相手に与えたいという気持ちも強く持っています。茶室の中では、客人は好意を受けるだけではなく、亭主に気持ちをお返しするさまざまな機会があります。だからこそ、それぞれが役割の中で自分の居場所をもつことができるのです。日本で「お客さん」としての役割が私にはフラストレーションだったということが茶室の中でわかったのです。日本の社会の中で茶室の中のような、つまりお互いに与えることも返すこともできる、平等な関係がほしかったのです。

だから私は茶室で習ったことを信じて、たとえ人に受け入れてもらえない時があっても、今の自分の立場に誇りを持って、その居場所を大切にしたいと思っています。

日本でのすべての出会いと経験は宝物です。茶道にも『一期一会』という言葉があります。

すべての時間と出会いが一生に一度しか訪れない大切な時間で、そのひとつひとつに心からのおもてなしをするという意味です。心をこめて一服のお茶をたてる。そしてその一服のお茶を感謝の心を持っていただく。お互いの役目を受け入れて、その居場所を大切に、みんなが一緒にひとつの空間を共有して楽しむのです。

一服のお茶には平安と感謝と相互理解があり、私はそこから多くのことを学び、自分の居場

所を見つけることが出来ました。今日私はみなさんにお茶をたてて差し上げることは出来ませんが、「一期一会」のこの瞬間を大切に、今日のこのスピーチを、心をこめてお伝えしたいと思います。